

新宿連絡会NEWS

VOL. 96

新宿野宿労働者の生活・就労保障を求める連絡会議

〒169-0075東京都新宿区高田馬場2-6-10

NPO新宿気付

TEL.03-6826-7802 FAX.03-5273-6895

<http://www.tokyohomeless.com>

見えてくるもの

笠井 和明

「今年も暑いだろうな」と、ほやきや諦めの声があちこちから聞こえてくる季節になった。

春から夏への路上は、冬を越したからといって「ほっと」した様子はあまり感じられない。

連絡会の「チラシ」に天気情報をよく書いたりしているのも、対象が屋外生活であるが故、生活全般が天候に左右されるから。最高気温と最低気温、気圧の変化、雨や風の状態、そういうものに注意を払っておかないと、雨風にさらされ、簡単に吹き飛ばされてしまうのが都市に暮らす路上生活者の定めである。

普通の雨でもそこそこ大変なのであるが、大雨、強風、台風ともなると、想像を絶するサバイバルとなる。居場所や寝場所に置いておいた荷物や寝具はすべてびしょ濡れ。隠しておいたダンボールも使い物にならない。かといって新しいものがすぐに手に入るわけでもない。着るものも濡れたままで、着替えもできない。そして、横にもなれない。しかも、じめじめとした暑さ。何とも言えない絶望である。平日の昼間であれば、新宿区の相談所「とまりぎ」や、連絡会の高田馬場にある事務所に駆け込み、雨宿りや着替えはできるが、天気はこちらの都合などお構いなし。それが夜だったり、雨宿りする場所すらなかったりすると、阿鼻叫喚である。

繁華街で暮らしている仲間には、いろいろな防衛策もある。路上で寝るのは危険だと判断したら、荷物は駅のコインロッカーに入れ、着替えを持って「ネットカフェ」や「サウナ」に避難する。荷物の置き場所も考えるし、予備のため複数箇所に置く。着替えは常に用意する、などなど。今は景気が良いので、路上の仲間にもアルバイトなり日雇いなり、現金仕事がある。稼いだお金は全部使わず、こういう時のためにとっておく。まあ、これができるのは、ある程度の「ベテランさん」ではあるが……。

多摩川なり、荒川なり、一級河川で小屋を建てたり、陸橋の下に陣取って廃品回収などを生業にしている仲間

の場合、台風や大雨の時は生活資材一切が流されたりもする。もちろん、着たきり雀で避難するしかない。運悪く我が身も流されてしまうこともある。年にそう何回もあることではないが、そういうリスクといつも隣り合わせである。今年は梅雨の時期でも台風が続き、大雨も多いようだ。心配ではある。

大きな気象事案が、あまり酷くならないことを祈るだけである。

さて、新宿駅の周辺は今や再開発の真っ最中。

これを「新宿グランドターミナル」と呼ぶそうで、単



に小田急百貨店本店の建て替えにとどまらず、西口広場から都庁、そして新宿中央公園に至るまで大変貌を遂げる計画とのこと。先日、そのイメージである「西新宿グランドモール（4号街路）デザインコンセプト」が公表された。何でも、車道境界にある壁の撤去などにより、「トンネル部は明るく見通しの良い開放的な歩行者空間へ再編」するらしい。もちろん、まだまだ10年後ぐらい先の話ではあるが、これから工事は順番に行われるとのことである。

今はトンネル部分に路上の仲間は居られず、寝ていたとしても監視カメラが設置されているのですぐに発覚する。警備員が来て、「出ていきなさい」となる。深夜帯はシャッターも閉まり、ここは完全には開放されていない。それもこれも、4号街路トンネル部分には数百人単位の路上の仲間が一時「不法占拠」し、それに業を煮やした東京都（当時は青島都政）が、「動く歩道」建設を名目に、「代執行」の手続きを経ない「強制排除策」をとるなど、大きな問題となったからである。これが「平成のホームレス問題・対策」の始まりの始まりであるが、結果的にトンネル部分は東京都が「奪取」し、そこから出された人々は駅前西口地下広場に移転した（その後、火災事故により自壊し、新宿中央公園へ自主退去）という歴史がある。

「ホームレス対策」の立場から考えると、ここは、この国初の「大規模ホームレスシェルター」（自然発生的ではあるが）の役割を果たした場所とも言える。雨風を凌げる安定した長いトンネル部分は、いかにも緊急時の「シェルター」であった。そこにダンボールで作った「棺桶」のような小屋（ダンボールハウス）や寝床を各人が持ち、歩行者の邪魔にならないよう一列に寝た。また、貧しい者同士の自治や組織も、ここからいつの間にか生まれた。連絡会の主要メンバーは、ほとんどがここで育ち、仲間と同じ生活をしていた。

そこから退いた身なので今さら反対もないのであるが、東京都からすれば、「ホームレス問題」もようやく落ち着いたので、西口トンネル部分の問題にも、ようやく手を加えられるようになったのだろうか。

喜ばしいことは、悪名高い「動く歩道」が、解体されるかもしれないことぐらい。

場所取り合戦的にいえば、4号街路トンネル内と中央公園部分は、その後いろいろなことがあって居所として使えなくなっているが、トンネルを抜けた都庁下周辺や中央公園周辺、また駅寄りのトンネルの先にある西口地下広場には、時間によってではあるが、まだまだ多くの仲間がいる。

どうやって工事を進めていくのか？この工事が終わるころには、全員居なくなっているのか？

まだ先のことなれど、それもまた心配である。

.....

ホームレス支援の基本は「炊き出し」と「パトロール」であると、誰が決めたわけではないが、出来ること

を突き詰めると、おのずからそうなるものである。

もちろん、「応急援護」はその場しのぎなので、その先のことは、いろいろ考えなければならない。当面は現状維持なのか、それとも当事者の意向に沿って「屋根」と「仕事」の保障を行政や社会に求めるのか、あるいは行政を敵視するのか、それとも自力でやっていこうとするのか、等々、その先の路線はたくさんあるが、それを模索するためにも、こちらも当事者の生の声を聞かなければ仕方がない。なので、「炊き出し」と「パトロール」など、現場に顔を出すことがとても大事であったりもする。

「炊き出し」とは読んで字のごとく、汗水流して米を炊き、調理をし、そして自ら出す「飯」のことである。既製品を渡したり、弁当を買って機械的に配ったりする「配給」とは、温かみがまるで違う。手作りは、こだわるポイントでもある。これはお役所ではできない、民間ならではの活動である。

その「炊き出し」も、情報化社会の中、宣伝してなくても勝手に宣伝され、ホームレスへの炊き出しだと主催者側が考えていたとしても、そうではない人々が集まるという現象がことに目立つようになった。そうではない人々のことを便宜上「生活困窮者」と呼んだりもするが、役所の場合は「非課税世帯」などと線引きがなされる一方、民間では線引きはほぼ不可能である。誰が来ているのか、本当に困っているのかどうかは分からない。そんなわけで、単なる「誰でも無料食料支援活動」になってしまう。

生活保護受給者も年金暮らしの人も、今の物価高でとても大変だと思うが、我も我も「困窮者なり」と、役所からもらった都営の無料バス券を駆使して都内を行ったり来たりするのは、何だか違うような気もする。とはいえ本人達にそれを言っても「馬に念仏」。「他にやることないんだよ」と言われると、それもそうなのかなと思ったりもする。人との交流がある場所に向かうのは悪いことではないが、ほどほどにしておかないと自分で自分の首を絞めることにもなる。

「炊き出し」の「場」の確保も、それはそれでとてもシビアなものなので、食べずに捨てる、散らかしっぱなしであまりにもだらしないとなれば、「やってくれるな」ともなる。列が伸びれば、列の後ろまで目が行き届かず、暴力だ、ハラスメントだと、トラブルが頻発する。そんなことが続けば、やめてしまう団体もあるが、それを誰も非難はできない。「それはそうだよ」「やられてないよね」と、実情を知る人ほどそう思う。

かつて、「炊き出し」を必要とする人がそんなに多くなかった時代、「列を作らせない炊き出し」というものを理想化し、試行した（当時は「共同炊事」なんて言っていた）こともあるが、これも集まる人が増えていくと、いつの間にか列で整理するようになり、2巡目を狙う人は先頭に並びたくなり、場所取り問題でトラブルになったりもする。「整理券方式」なんてものを開発した団体もあるが、これもまた大変なので、それほど広まら

なかった。

なので「きっちりと整列」「一定のルールを決める」と、管理型の、理想にはほど遠い配膳方法になってしまいう。

「必要な人に必要な量」を提供するのは至難の業でもある。作るのも、量が多くなればそれ相応の厨房も必要で、衛生面にも気をつけなければならない。そして配るのもまた大変である。「飯」の問題には、人知れぬ苦勞が多い。

どちらかといえば、「パトロール」の方がストレスは少ない。

かつて、「寄せ場」での「パトロール」は、野宿者を守るための「防犯パトロール」で、デモンストレーションのような側面があった。よくある「暴力団排除パトロール」（歌舞伎町では今もやられているが）と同じで、巡回して当事者に聞き込み、辻強盗（「モガキ」）などの被害や襲撃事件の有無などを調べるとともに、ビラを使って「一人で寝るな」「決して独りじゃない」「何かあったら連絡を」などと啓発する活動を総じて「パトロール」と呼んだ。その後、そこに医療従事者など「ボランティア系」の人々も加わることとなり、パトロールは「夜回り」「巡回相談」「アウトリーチ」のようなソフトな用語に変わり、形も多少は変わったが、中身は基本的に同じ。

そして、今では新宿福祉事務所など行政も「巡回活動」は積極的に取り組んでいる。

そのパトロールに「チラシ」はつきものでもある。連絡会の場合はセット品である。

毎週発行している「チラシ」は名刺代わり。その時々政治や経済を解説したり、世相を風刺してみたり、野宿であることを恥じずに生きろとメッセージを送ったり、困った時はどうしたら良いのかを行政のホームレス対策を紹介しながら施策に結びつけたり、私たちは昔も今も「仲間たち」と呼びかける。ま、路上の「瓦版」のようなものである。連絡会にどこへ行けば会えるのかを毎週のスケジュールとして示し、また、相談所「とまりぎ」の情報や行政の施策一覧のようなものは、チラシの裏面に書かれてある。煽るだけの「アジビラ」とは、ちと趣が違う。

パトロールでもらった「チラシ」を握りしめ、福祉事務所に駆け込む仲間も多くいたし、今もいるので、そんな話を聞くだけで、「シメシメ」となる。

越年越冬が終われば、そんないつもの活動を黙々と続けるのが連絡会。

「走りながら」改め、「歩きながら静かに考える」。そんなスタイル。

.....

都内の路上生活者の数は明らかに年々減っている。それは、東京都が年二回発表している「概数調査」の数で

も確認できる。

長きに亘り、それだけを見続ける人は少なくなったが、「まだ新宿には路上生活を余儀なくされた人々が多く居るよ」と云うと、「何故ホームレスの人たちは生活保護にかからないのか？」という質問が必ず返って来る。これは設問の仕方がとても悪い。そんな質問より「何故ホームレスの人々はその場所や地域から動こうとしないのか？」という問いを發し、その答えを見いだす方が今は、はるかに重要であつたりもする。

彼、彼女がどのように暮らしているのかを知らなければ、ニーズ把握や制度適用（生活保護も自立支援も民間も自力も）には結びつかない。

東京の現状をおおまかに俯瞰してみると、都立公園、区立公園を中心にした「地域生活移行支援事業」（2004年から2009年）により、東京都の路上生活者数は劇的に減った。同時にこの時期、民間宿泊施設が都内全域で多く開設され、施設での生活保護適用率も上がり、また、簡易宿泊所や、学生向け・単身者向けの四畳半アパートでの保護も進んだ。また、景気の回復過程の中、自立支援センターなど就労支援対策も強化され、「ホームレス自立支援特別措置法」も出来たこともあり、路上から次のステップへ移行できる環境は整っていった。

他方、アルミ缶収集や雑誌収集・販売などで自力で生活している人々が多く路上に残ったのであるが、それらの人々に対する炊き出しなどのボランティア活動も多くなり、特定の場所であれば路上でも当面は生きていける環境にもなった。

それが固定化され、「長期化」「高齢化」の時代（分散よりも限られた特定の場所）に移った。



新宿など集住地域が大きく、ターミナル駅を有する地域では、新規流入圧力というものがあるが、これも「生活困窮者自立支援法」（2013年制定）に基づく施策が全国的に施行され、若年層への生活保護適用も各地で行われ、今は「ひきこもり」対策なども強化されたこともあり、都市への困窮層の流入・流動は、「バブル崩壊」「金融危機」「リーマンショック」以降、だいぶ落ち着いた。

経済危機があったとしても、失業者、困窮者は積極的にホームレス化しない。その前段階で何らかの支援が入る。そのための相談場所も多くなった。

こういう傾向なので、今の「ホームレス問題」は、自分の力や仲間の力などで生活を維持できる、ある意味「自立」している仲間や、生活保護受給者や年金生活者が施策の網から抜け落ちて再び路上生活となった（出戻り組）仲間と、何らかの理由で各地を流動している仲間がメインでもある。

そして、それに加えて、新宿区の指摘などもあり最近注目されている「目に見えぬ若いホームレス」の人々。

若い仲間はスマホ一台でバイトや仕事を探したりもする。履歴書はいらないし、面接もネットで、もしくは面接なしでもよい。身分証明もマイナンバーカードがスマホに登録されていればそれで大丈夫。「スキマバイト」というものが大々的にコマーシャルを打っているが、好きな時間に、自分のスキルでバイトができ、収入になるという就労形態が、手軽さもあって流行っている。わざわざハローワークに行くこともないし、自立支援センターに入ることもない。

都内で一人暮らしをするとなると、家賃はとても高い。家賃までは払えないが、スマホ代と生活費が賄える程度に働き、足りなくなったら炊き出しに並び、寝る場所は軒下とし、お金のあつた時はネットカフェ。そんな暮らし方も景気のいい今なら可能なのである。東京でなければ家賃も安い、東京でなければ仕事へのアクセスがなくなる。背に腹は代えられず、やむを得ずということもある。時代はだいぶ変わってしまった。「衣食住」から「衣食スマホ」のようである。「住まいがない」とか「不安定なこと」が、必ずしも「困窮」とはいえない人々も生み出している。通信料を払わなくても、Wi-Fiさえあれば通信もできるし電話もできる。そういう場所を見つければ、そこがどこであろうと生活拠点となる。はた目にはひとりぼっちのようでも、実は社会との接点をすごくもっていたりもする。

「ホームレス」とは一体誰なのか？

よくよく注視しておかないと、分からなくもなる。

その「概数調査」の最新版（令和7年度冬期版）。数の方は特に大きな変化はなく、「区別」では新宿都庁下

の「ふれあい通り」の工事が終わったこともあり、新宿区が75名でトップに返り咲いたことぐらい（つまりは工事の間だけ、お隣の渋谷区に避難していただけの話であるが……）。散々「精度が悪い」と皮肉ってきた夜間の新宿駅調査も107名と、ようやく実態に即してきた。

「場所別」の統計を見ても面白い。今回の調査では全体507名の内、41%が河川敷、公園が29%、道路が24%で確認されたとなっている。ほぼ半分は「河川敷」と常々言ってきたが、この傾向は近年ほぼ変わらない。

固定したテントではなく、公園や河川敷にある施設などのベンチを占有して、半定住で、独りで暮らす仲間もこの調査でも多く含まれていると思われる。

公園周辺の道路を歩いていると、荷物をくくり付けている様子が多く見られるが、これは夜になって荷物を出したり移動したりして、公園の中などで寝るのであるが、こちらは、道路でカウントされているのであろう。

河川敷、都立公園、区立公園とその周辺道路に、昼間は定住、半定住の仲間が目立ち、夜になるとターミナル駅周辺で流動層の仲間。それらは、だいたい決まりきった特定の場所。

流動層の仲間は毎日、毎日、ある時間になるとどこからともなく集まり、暗黙の了解で決められた場所に寝て、時間になると片づけ、荷物を収納して去っていく。新宿は屋根のある大きな地下広場の存在がねぐらとして適していることもあり、そんな傾向が強い。それだけであれば、「捕捉」は比較的容易なのであるが、集住地域以外で「ポツン」と休んだり横になったりする人の姿も多くなった。もともと、そういう人々が「ポツン」とでは寂しい危険だということで連れを作り、集住となるのであるが、人間関係に疲れ、「独りにしてくれ」と再び「ポツン」となる場合もある。そのような傾向も目立



ってきた。女性の場合は特にそういうケースが多い。

転々としていれば、見かける場所は一定しない。そうだろうと思って行ってみても、居ないことの方が多い。それを追いかけるのは大変なのであるが、ご当人は「わざわざ追いかけるのはやめてくれ」と思っているやもしれない。

民間や役所の「巡回相談」なんてものは「おせっかい」の極みである。「大丈夫ですか!」「大変ですね!」「身体の悪いところはありませんか!」と、騒ぎ立てられれば、逃げたくもなる。

そういう場合は、そっと見守るしかない……。相手も覚えてくれて、アイコンタクトが出来るようになるまで、見守ることである。

その時々によって、また地域によっても仲間の在り方は変わっていく。居住場所も再開発などで少しずつ変わる。働き方も変わる。

いろいろなことが見えてくるのも、あまりにも長くこの地でこの問題に関わっているからか……。

……

宮本常一『忘れられた日本人』にある「世間師」の実像を知りたく、小栗風葉の『世間師』（1908年）という小説を読む。「青空文庫」にも入っているので、今はネットで無料で読める。

小栗風葉は明治8年生まれ、横山源之助とほぼ同世代の愛知出身の小説家。この小説は、「国外れの海に臨んだ古い港町」の、「蚤だか虱だか」が「体じゅうを刺し廻る」、「薄い筵（むしろ）のような」「襦袢布団に裹（くるま）って十人近くも寝ている」木賃宿に泊まり歩き、国元があってもそこには戻らず、旅から旅へと、今でいえば雑業仕事をしながら流浪、漂泊する人々の姿をととても良く描写してあり、「襦袢を着てても心は錦」「義理人情」など、今では廃ってしまった底辺・下層労働者の心意気と、どないしょうもない生命力を感じさせる良い小説であった。

宮本常一の「世間師」は、「村」に「知識や情報等」を「持ち帰る」ことで「世間師」たるのであるが、小栗風葉の「世間師」は、まるで「フーテンの寅さん」で、どちらかといえば「人情」だけを持ち帰る。「世間師」は下層の「オルガナイザー」なのか、単なる庶民の「もの知り」なのか、「お騒がせな人」なのか。結局はどちらにもなり得る存在なのだろうが、ご当人たちがそれをあまり自覚していないところが、民族学的でとても良い。そういえば、山谷のドヤ街にも、新宿の路上にもそんな仲間はたくさん居たような気がする。

かつて「新宿旭町」と呼ばれた、今は新宿4丁目の旧簡易宿泊所街。「日本のゴッホ」と名声が上がったのは死後のこと。山谷や新宿の木賃宿を転々とし、救世軍の宿泊所にも入り、悪い酒で体をこわし、最後は三河島で

行き倒れ、板橋の東京市養育院で行路病者として収容されたあと亡くなった放浪の天才画家、長谷川利行が、「天城画廊」で個展を開くため（缶詰めにされ）移り住んだのも、この「新宿旭町」のドヤである。その頃描いた晩年の代表作といわれる「新宿風景」は、今や「国立近代美術館」に所蔵されている。描写ではなく、街のエネルギーそのものをキャンバスに刻みつけたような絵である。「筆がなければ指で描く」という激しく情熱的な作風であったようだ。長谷川利行の碑（墓）は、上野の不忍池弁天島に戦後、友人達の手で建てられ、今も残っている（「利行碑」と書かれたその文字は、「画壇の仙人」と呼ばれた熊谷守一画伯のもの）。

江戸の昔は「四谷旭町」と呼ばれ、甲州街道沿いにある四谷天龍寺門前、「帝都の細民街で知られた木賃宿・共同長屋の巢」といわれたのが「旭町」のドヤ街。

横山源之助が記した明治期の「三大貧民窟」として名高い「四谷鮫河橋」も、「内藤新宿」のすぐ近く。貧民窟になったのは明治以降で、農村から貧民が多くたどり着き、スラム街を形成した。江戸時代から「岡場所」があり、街道沿いでもあり、多くの芸人達や人夫が住み、それこそ「世間師」のような漂泊する人々が多く行き交った長屋や木賃宿街であった。貧民窟としての起源はどっちもどっち。だが、鮫河町の方はあまりにもスラム化が激しかったのでクリアランスされ、関東大震災後には貧民窟の面影はなくなったようだ。代わりに、もともとあった「旭町」に一大ドヤ街が形成されたのであろう。宿場町ならではの「岡場所」は「歌舞伎町」に代わり、その後、戦争もあり、街の名前も変わりながら、新宿の下層社会を象徴するように、ビジネスホテルの名のもと日雇労働者相手に細々と営業していたが、ここもだいたい変わった。今は民泊系ホテルがその残滓である。福祉界隈で有名だったのは「新宿荘」。バブル期に建て替えもせず、ついこの間まで営業を続けてきたこの文化財的な簡易宿泊所も、昨年末、ついに大手デベロッパーの手で取り壊された。

「鮫河橋」では、とても有名な「双葉貧民幼稚園」ができ、今も社会福祉法人としてその歴史を伝えているが、旧「旭町」のすぐ近くには、特人厚が運営する「厚生施設千駄ヶ谷荘」もある。この場所を巡ると興味が尽きない。

新宿の街を歩いていると、こう云ういろいろな「幻」や「歴史」と出会う。「パトロール」の面白さは、そんなところにもある。

貧者が暮らしてきた、そして今でも暮らし続けているこの街を見つめ、何かを感じるため、もうしばらく歩いてみるか。

(了)

花見の会 2026

今年の花見は開花予想を見ながら早めに予定を立てた。珍しくドンピシャとなり、天気も好天。

冬の疲れを癒やすため、仲間による「新宿花見の会」

が3月28日、新宿中央公園にて実施されました。

中央公園は花見シーズンともなれば、毎年一般向けに芝生広場が開放されるのが通例でしたが、今年は何と、広場では子供向けのイベントが開催され、芝生の上にもテントの売店が並ぶなど、こちらでも何やらイベント。その影響で公園の端の方に追いやられましたが、桜の木が辛うじて一本あった区民ギャラリー付近で場所取りに成功。そこを拠点に、朝から事務所で作った「生姜焼き弁当」を集まった150名近い仲間に配食。ビールやチューハイ、日本酒やおつまみなど、出るは、出るはの花見の宴。

相当な人ごみと場所の狭さで、車座とはいかなかったが、それぞれあちこちに腰かけながら旧交を温め合いました。

遠い場所から駆けつけてくれた仲間も、新宿の地でしぶとく路上の暮しを続けて来た仲間も、皆仲間ということで、冬を越した喜びを共有しました。



越後「いろりん村」プロジェクト 2026 開始

昨年は「令和の米騒動」と騒がれ、米価が上がり、政府が備蓄米を放出するなどの事態となり、生産現場や農政全般も注目され、議論され続けた年でした。しかし、昨年の新米は豊作だったからか、今年は一転、在庫も膨らみ、価格も落ち着き、この騒動は収束したようです。

いつも食べているお米が、いかに大事で大切かを、この一連の出来事で知ることにもなりました。

連絡会が毎週おにぎり作りなどに使っているお米は、信州「山谷農場」の並々ならぬ尽力のおかげで「不足」することなく、年間を通しておいしい「おにぎり」を提供することができています。

「山谷農場」の皆さん、そして貴重なお米を寄附して下さる米生産者の皆さん、本当にありがとうございます。

連絡会は、越後「いろりん村」での農作業体験、米作り体験を通し、地方との交流をささやかながら実践しています。

今年も5月、6月と、仲間が泊まり込みで「いろりん村」に滞在し、草刈り作業やサツマイモ栽培、そして田植えを経験して来ました。秋の収穫に向け、今年も頑張って農作業、そして交流を続けて行きたいと思います。



巡回 おにパト報告

連絡会の基本活動である「おにぎりパトロール」活動は、毎週欠かさず、年間を通して行なっています。おにぎりは高田馬場の厨房で米を炊き、皆でわいわい言いながら握り、それを車に載せて都庁の下へ運び、衣類などを配布した後、いくつかの班に分かれて新宿駅周辺地域を回ります。チラシと一緒におにぎりを渡し、野宿している仲間に挨拶をし、声をかけながら回り、相談があれば乗るという活動です。月に二回は深夜の時間帯でのパトロールも実施しています。また、高田馬場地域では毎週水曜日にパトロールを行い、その他の地域でも随時、パトロールを実施しています。

「パトロールで結べ！」を合言葉に、仲間の団結やつながりを作る活動として、食料や医療とも結びつきながら、ゆるやかな新宿連絡会のネットワークを作っています。

おにぎり巡回パトロール 3-6月越冬期実績

		都庁	西	公園	東	小計		周辺部	戸山地区	合計	
						(前年同月比)				(前年同月比)	
2026	3月1日	61	23	11	39	134					
	3月8日	54	16	11	32	113					
	3月15日	54	29	11	35	129					
	3月22日	59	21	9	38	127					
	3月29日	55	20	9	38	122					
	3月平均	57	22	10	36	125	(+7)	11	9	145	(+6)
	4月5日	61	27	9	41	138					
	4月12日	50	19	7	34	110					
	4月19日	66	23	10	42	141					
	4月26日	42	22	12	42	118					
	4月平均	55	23	10	40	127	(+12)	10	8	145	(+10)
	5月3日	56	24	13	44	137					
	5月10日	48	27	14	45	134					
	5月17日	57	27	14	45	143					
	5月24日	59	20	13	41	133					
	5月31日	63	29	12	37	141					
	5月平均	57	25	13	42	138	(+16)	9	9	156	(+14)
	6月7日	57	34	10	41	142					
	6月14日	48	26	12	41	127					
	6月21日	53	30	12	45	140					
	6月28日	41	30	10	45	126					
	6月平均	50	30	11	43	134	(+12)	10	8	152	(+5)
									4ヶ月平均	150	(+9)

深夜巡回（パトロール/軽食配布、毛布配布 3月より6月）活動で出会った仲間の数

2026									
日時	天候	4号街路	都庁下周辺	西口地下	西口地上	東(御苑含)	大ガード周辺	新南口周辺	深夜計
3/8-9深夜	曇	24	22	62	16	3	7	19	153
3/22-23深夜	曇	38	23	52	15	2	7	21	158
4/12-13深夜	晴	28	20	49	13	3	8	20	141
4/26-27深夜	晴	24	20	47	12	3	7	21	134
5/10-11深夜	晴	25	20	51	14	2	7	22	141
5/24-25深夜	曇	21	24	47	14	2	6	22	136
6/14-15深夜	曇	26	25	52	16	3	6	24	152
6/28-29深夜	雨	29	25	51	14	2	4	24	149
							平均	146名	前年比-8名

夏まつりへ

今年もやります。新宿夏まつり。

暑さもあり、時間限定、ピンポイントの恒例イベントです。慰霊祭のあと、夏は冷たいものをと、特製「冷やし中華」を作って出します。暑気払いの飲み物もあり、塩あめやタオルの配布もあります。

無念にも路上で亡くなった仲間を思い、残った仲間がどうにかこうにか生き抜くため、仲間が集まり、祈ります。

夏まつり・慰霊祭 2026

in 新宿中央公園

2026/8/11 (火・祝) PM16:00より

慰霊祭&炊出し (冷やし中華)

& 暑気払い (ビールなど飲料)

主催・新宿連絡会

新宿連絡会 会計報告

多くの方々からの寄付に支えられ、新宿連絡会は長年活動が続けて来ました。寄付として頂いたものは、野宿の仲間間違いないと返してまいりました。本当にありがとうございました。

昨年度の収支報告について、事業費の「その他」の支出が大きくなっていて、かつ分かりにくいのご指摘を受け、新たな科目に分割してみました。

「仕事作り事業費」は、連絡会が「ゴミ出し」などの仕事を作り、その作業を若い仲間のグループに提供するための費用です。

昨年は、高田馬場事務所倉庫などの「ゴミ出し整理作業」、NPO新宿が借り上げているアパートの「整理」「内装」などを行ないました。

単発の仕事ですが、それでも就労の訓練にもなっています。その結果、自分達でちょっとした仕事をもらって来たりと、仕事の輪が広がっています。

就労支援の取り組みは、「ハローワーク」のような大きな枠組みだけでなく、小さな民間の活動でも可能であることを「いろりん村」の就農支援と共に試行しています。

「衣類提供活動費」は、事務所で整理、仕分け作業に伴う費用となります。

上記活動以外の費用が「その他事業費」となります。

また、今年度から管理費の「事務所費分担金」の月額が変わります。これまで長いこと格安にしてもらっていたのですが、賃料の値上げは今の世、今年度からは実費で支出していくことになりました。

これからも明るく、元気に、仲間に希望を与える活動を続けていきます。そして、皆様方のお力だけが頼りです。引き続き、ご支援の程、宜しくお願い致します。

2025年度 新宿連絡会収支報告

勘定科目	金額	勘定科目	金額
I 計上収入の部		2 管理費	
1 寄付金収入	3,904,395	旅費交通費	12,270
計上収入合計	3,904,395	通信費	117,040
II 計上支出の部		消耗品費	52,519
1 事業費		事務用品費	50,021
食事提供事業費	893,524	事務所費分担金	360,000
仕事作り事業費	1,117,148	衛生管理費	44,624
就農支援費	189,974	支払手数料	94,116
巡回活動費	735,782	車両費	208,449
衣類提供活動費	125,953	修繕費	3,459
越年越冬事業費	1,710,933	計上支出合計	6,169,611
夏まつり事業費	222,970	計上収支差額	△2,265,216
花見など娯楽費	213,597	前期収支差額	3,442,794
その他事業費	17,232	次期繰越金	1,177,578

2026年度 4月～6月新宿連絡会収支報告

勘定科目	金額	勘定科目	金額
I 計上収入の部		2 管理費	
1 寄付金収入	400,000	事務所倉庫分担金	600,000
計上収入合計	400,000	車両費	48,207
II 計上支出の部		旅費交通費	0
1 事業費		事務用品費	9,934
食事提供事業費	258,545	通信費	0
仕事作り事業費	26,380	衛生管理費	8,180
就農支援費	123,252	消耗品費	6,091
巡回活動費	223,802	支払手数料	3,751
衣類提供活動費	53,052	修繕費	2,634
その他事業費	27,439	雑費	0
		計上支出合計	1,391,267
		計上収支差額	△991,267
		前期収支差額	1,177,578
		次期繰越金	186,311

●活動カンパ

振込は 郵便振替口座00160-6-190947「新宿連絡会」まで。

●郵便物、物資カンパの送付先は以下の住所をお願いします

〒169-0075 東京都新宿区高田馬場2-6-10-106号NPO新宿気付「新宿連絡会」宛てでお願いします。